平成 30 年度滋賀県立大学 SDGs 特化型地域課題研究

留学生×地域
地域資源発掘プロジェクト
報告書

滋賀県立大学　全学共通教育推進機構
島田和久

留学生×地域 地域資源発掘プロジェクト 報告書
Vol.1 2019 年 3 月

留学生×地域
地域資源発掘プロジェクト
報告書

2019.3

Vol.1

滋賀県立大学　全学共通教育推進機構
島田和久

この報告書は滋賀県立大学の平成三〇年度学内公募型研究費（ＳＤＧｓ特化型地域課題研究）の助成を受けて作成しました。

目　次

はじめに　～持続可能な地域づくりと大学の国際交流の推進～　2
事例研究一　近江八幡市地域滞在プログラム　5
事例研究二　長浜市地域社会体験プログラム　10
事例研究三　甲賀市国際交流フェスタ参加　13
事例研究四　留学生目線による長浜市の地域資源発掘ビデオ発表会　16
事例研究五　留学生による甲賀市の地域文化体験　20
おわりに　23

はじめに　～持続可能な地域づくりと大学の国際交流の推進～

本書は、滋賀県立大学のＳＤＧｓ宣言に基づき、持続可能な地域づくりのためのマルチステークホルダー（多様な利害関係者）間のパートナーシップ（連携）の構築を目指し、本学の留学生（注一）が地域にて活動した五つの事例の報告です。

滋賀県立大学では大学の国際化を推進しており、そのための取り組みが研究・教育の両面で全学を挙げて進められています。教育面では、留学生受入プログラムの開発、および受け入れた留学生と本学日本人学生との交流プログラムの開発などが行われています。

本書で紹介する五つの事例研究は、この国際化教育プログラムの枠組みを用いて持続可能な地域づくりに向けた取り組みを大学と地域が連携して行うものです。事例研究一・二・四・五は、留学生目線で地域資源を発掘する試みです。また、事例研究三は、滋賀県立大学に学ぶ日本人学生と留学生が授業の中で学んだＳＤＧｓについて地域住民に発信する試みです。いずれも、大学、留学生、地域住民、地元企業・団体からなるマルチステークホルダーが連携しながら活動を進めていくことが求められます（図１）。滋賀県立大学は地域に根差した大学であり、地域とのパートナーシップを率先して進めています。地域と大学とが連携する目的は多様ですが、生態系の保護であったり、外国人労働者との多文化共生型の社会づくりであったりと、多くのケースでは課題解決型の連携となっています。本プロジェクトの試みである、「留学生による地域資源発掘」はこれとは少し異なるものであ

ると言うことができます。それは、地域住民にとっては気にもかけないような普通のことが、留学生の目線で見たときにはとても新鮮であり素晴らしく映るものがあるはずである、という仮定に基づいている点です。留学生が魅力的に感じるものを見つけて指摘することで、それを活用した地域づくりが進むことを目指すものです。活気あふれる地域からは、地域住民の間の交流が促進されて地域が直面する様々な課題に対して地域が一体となって取り組むことも可能となるでしょう。そのような地域の持つ潜在的な力を高めること、そして、高めた地域力を持続するような仕組み（モデル）を提示することをこのプロジェクトの最終目標としています。

今年は初年度であり、まだ予備調査段階ではありますが、今回実施した五つの事例から最終目標に向けた課題や見通しについて、本報告書で紹介したいと思います。

（注一）今回参加した留学生はすべて、本学との国際交流協定の基づく海外協定校からの交換留学生です。

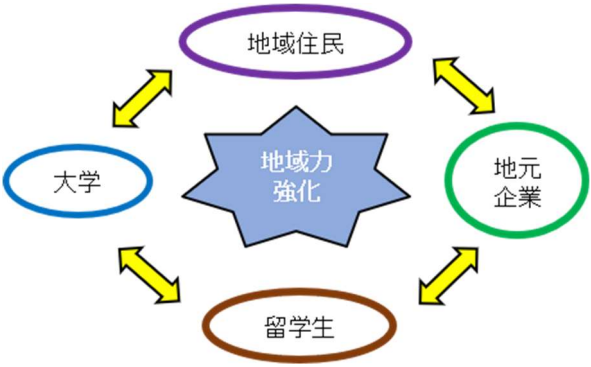

図1　地域力の強化のための連携

事例研究一　近江八幡市地域滞在プログラム

二〇一八年一二月八日（土）～九日（日）の二日間、滋賀県立大学に学ぶ交換留学生四人が近江八幡市内にホームステイしながら地域の人々とともに時間を過ごし、この地の人・歴史・文化など地域のよさを「外から目線」で体験しました。今回の二日間のプログラムは、年の二〇一九年七月に実施予定の二週間の留学生地域滞在プログラムのパイロットスタディ（実験的な実施）として行われました。交換留学生の構成は、オーストラリア人三名（うち男性二名、女性一名）、イギリス人一名（女性一名）でした。オーストラリア人学生三名はこの時、二セメスター目（二〇一八年前期に本学にて留学開始）、イギリス人学生は一セメスター目（二〇一八年後期に本学にて留学開始）です。いずれも英語圏の学生でした。参加者は、県立大の留学生四人に加え、地域から二〇人ほどの住民、地元のまちづくり会社社員、近隣の私立高校の五人の高校生、滋賀県立大学から五人の日本人学生でした。

二日間の内容を図2に示します。初日は、午前九時三〇分に留学生たちが近江八幡駅に各自で集合し、地域住民の出迎えを受けて最初の活動場所へ向いました。午前一〇時からは地域の子供英語教室にて英語レッスンに参加しました。クリスマスが近かったため、留学生たちは子供たちにクリスマスに関する質問をしたり、自分たちの国でのクリスマスの様子を説明しました。留学生たちは、「地元の子供たちと交流ができて楽しかった」、「子供たちが英語レッスンに積極的に参加していた」と感じたようで、英語レッスンへの参加は成功に終わりました（写真1）。

12月8日	10:00〜12:00	Kids English
	12:00〜13:00	Lunch
	13:00〜16:00	Kimono walk
	16:30〜18:00	English talk
	18:00〜	Host family
12月9日	10:00〜12:00	Kawara Museum
	12:00〜13:00	Lunch
	13:30〜16:30	Tea ceremony
	16:30〜17:30	Talk with locals

図2　活動タイムテーブル

一方、「時間が短くてすべての子供たちと話ができなかった」という課題が残りました。午後は地元の着付師の指導のもと着物を着用し、時代劇のロケで頻繁に使われる八幡堀を散策しました（写真2）。これは、地元の私立高校の生徒五人が中心となって企画したものでした。留学生たちは日本の伝統的な着物を着用して、時代劇のロケにも使われている風景の中を散策してとても満足であった、という感想を残しています。特に、留学生同士で写真を撮影し合ったことがとても印象に残ったようです。一方で、着付けを行う部屋にプライバシーがなく、この点は改善をして欲しいという意見が出ました。一六時三〇分からは地域のカフェにて留学生と地域住民とが英語で交流（大人は意見交換、子供はゲーム）しました。この場で、この夜の滞在先となるホストファミリーとの対面をしました。英語を勉強している様々な年代の人たちとの交流は留学生たちにとってとても充実したものとなりました。予定の一時間半があっという間に過ぎてしまい、もっと時間が欲しかったという感想が留学生から寄せられました。一方、地域の方々も充実した時間を過ごせたと言っており、留学生、地域住民双方にとって満足度の高い時間となりました。カフェでの時間が終わった後はホストファミリーとともに滞在先へと向かい、それぞれの家族との時間を過ごしました。今回は週末の一泊だけだったので、もっと長く滞在したかったという意見が留学生から聞かれました。二日目の午前は、かわらミュージアムで瓦の素材を使った工芸品の製作をしました。留学生たちはカップを作ったり

自分で考えたキャラクターを作ったりと、思い思いの作品が作れたことにとても満足していました。作品は窯で焼かれて一週間後に留学生の手に届きました。作品づくりを行う前に日本の伝統的な瓦づくりについての説明をもっと聞きたかったという意見があり、瓦に対する関心の高さを感じました。日本人学生も参加したのですが、自国の文化について深く知るための良いきっかけとなったということでした。日本人学生は、日本で留学生が疑問に思うことや知りたいと思うことを自分たちは当然のこととして捉えていることから、説明を求められても戸惑ってしまい、もっと事前に瓦について学んでおきたかったという感想を述べていました。午後は茶道を実体験しました。留学生のみならず、日本人学生も正座をすることが苦痛であったということでした。外国人のみならず、日本の若い世代も今では正座をする機会が激減しており、日本の伝統文化をより多くの人に体験してもらうためにも、社会の変化に合わせた対応が必要となっていると感じました。今回のプログラムの最後は、プログラムに参加した地域住民の方々が留学生に感想を聞く時間でした。留学生たちはホストファミリーに好印象をもっていたことがわかり、また、プログラムの改善点も把握できる機会となりました。今夏に実施する二週間の留学生地域滞在プログラムに対して多くの示唆を得ることができました。

今回のプログラムは、私が一年前にこの地域に話を持ちかけて以来、地域住民、地元の高校生、日本人学生、まちづくりの専門家といった多様な参加者によって度重なる打ち合わせを経て実現しました。特に、地域住民のリーダーを担った方は準備段階から非常に熱心に活動し、その活動の輪を地域に広げていくことに成功しました。そのような準備の甲斐あって、留学生たちはこの地域が誇る伝統文化や人の温もりに触れ、また、地域住民は留学生たちの明るく素直な心を感じ、終了時には双方の胸に熱い思いがこみ上げるようなプログラムとなりました。

今回のプログラムではマルチステークホルダーによるパートナーシップ構築への手ごたえを感じることができました。また、今回参加した地域の方からは、このプログラムの準備を通じて、これまで知らなかった地域の人たちと話をして協働することができたことは有域であったということを聞きました。

今回のパイロットスタディを通して、今夏に実施予定の留学生地域滞在プログラムの内容をブラッシュアップするとともに、地域住民同士の交流を拡げかつ、参加者のすそ野も拡げながら、この地の地域力を高めることに役立てられればよいと願っています。

写真1　英語教室にて

写真2　和装で八幡堀にて

事例研究二　長浜市地域社会体験プログラム

二〇一八年一二月一五日（土）～一六日（日）の二日間、滋賀県立大学に学ぶ交換留学生二人が長浜市内に滞在し、長浜太閤温泉 浜湖月にて館内仕事体験を実施、また、長浜市の自然環境や伝統文化に触れる体験をしました（図3）。留学生の構成は、ドイツ人とアメリカ人が各一名（男女一名ずつ）でした。

初日は午前一〇時より長浜市の歴史・文化および代表的な観光地についてガイダンスを受け、続いて浜湖月の館内を見て歩きながら施設概要について説明を受けました。午後からは館内仕事体験として食器洗いをしました。二人の留学生は、厨房にある洗い場で地元の高校に通うアルバイト学生二人から作業を教わりながら下膳された食器を洗う作業を行いました（写真3）。最初は留学生、高校生ともに緊張気味でしたが、すぐに打ち解け、身振り手振りで意思疎通を図るようになりました。高校生たちはこれまで地元で外国人と会う機会がほとんどなかったのですが、洗い場での身振り手ぶりでの短いコミュニケーションを通して、英

12月15日	10:00～12:00	長浜観光案内 旅館施設案内
	12:00～13:00	昼食
	13:00～17:00	インターンシップ（食器洗い）
12月16日	10:00～12:00	インターンシップ（客室清掃）
	12:00～13:00	昼食
	13:00～14:00	琵琶湖渡鳥観察
	14:00～15:00	富田人形浄瑠璃 体験

図3　活動タイムテーブル

語を使うことに対する抵抗感が少し薄れたとのことでした。また、二人の留学生は従業員が食器を洗う際に、素早くかつ細やかに作業を行っていることに感銘しており、日本人の仕事に対する取り組み方を学ぶことができたとのことでした。

翌日（一六日）の午前中は、宿泊客がチェックアウトした後の客室清掃をしました。二時間ほどの間に七部屋のベッドメイキングと室内清掃を行い、想像以上に重労働であることを知りました。また、細部にまで気を使いながら手際よく行う清掃作業が印象的だったとのことです。浜湖月での業務体験は、おもてなしの心と細やかなサービスが行き届いた日本のホテルの裏側で、スタッフが想像以上に多くの作業を短時間でこなしていることが分かりました。

午後からは、日本人学生も加わって環境省琵琶湖水鳥湿地センターを訪問しました。ここでは、オオヒシクイやコハクチョウ、オオワシなど冬の渡り鳥を双眼鏡で観察しました。その後、富田人形会館を訪問し、阿部秀彦氏（富田人形共遊団・団長）の指導のもと、百年以上の伝統を誇る人形浄瑠璃を三人一組になって操りました（写真4）。三人で浄瑠璃を操るのはとても難しくチームワークの大切さを実感したようです（阿部団長は、アメリカの大学をカウンターパートとして留学生を地域に直接受け入れて二か月間ホームステイをしてきた実績を持っています）。

この日は地域の自然環境と伝統文化に触れ、いっそう滋賀を理解する日となりました。二日間という短い時間でしたが、地域に深く入り込んで文化・社会・自然環境を理解するとてもよい機会になりました。

写真3　食器洗いに参加

写真4　富田人形浄瑠璃を体験

事例研究三　甲賀市国際交流フェスタ参加

二〇一八年一二月九日（日）、滋賀県立大学で学ぶ交換留学生一五名と日本人学生七名がＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）について二〇一八年度後期授業（Ｊａｐａｎ　Ｓｔｕｄｉｅｓ　Ⅳ）で学んだことを甲賀市で発表しました。テーマは、『日本がＳＤＧｓに関して海外に貢献できること』です。授業では、六つのグループを作り、グループ毎にポスターを作成してＳＤＧｓの一七個あるゴールのなかから一つを選び、ＳＤＧｓという視点から日本がこれまでにどのような国際貢献をしてきたか、そして、そのゴールに向けて今後どのような貢献ができるか、ということをまとめました。授業のなかでポスターを作成するにあたり、各グループでは、「大学の授業で学んだことを地域に還元する」という視点に立ち、できるだけ多くの人に理解してもらえるようにわかりやすく説明することに注力しました。

甲賀市水口の碧水ホールで開催された国際交流フェスタ２０１８に県大ブースを開設し、ポスターを使って来訪する市民の方々にグループ毎に説明をしました（写真５）。説明には、あらかじめ作成した日本語版のポスターを使いました（図４）。ブース来訪者は日本人に加えて、インドネシア人、イギリス人、ブラジル人など甲賀市に住む外国人でした。日本語が不十分な留学生には日本人学生がサポートし、また、外国人がブースに来訪した際には留学生が英語で日本人学生をサポートしながら、少しでも多くの方々に自分たちの学んだことを説明するように心がけました（写真６）。

この授業を通して、学生たちはＳＤＧｓについて学ぶとともに、留学生と日本人学生の混成グループでお互いに理解し合いながら助け合って協働することの大切さや、目標に向かって文化的背景の異なる人々と協働することの大切さを学びました。

このプログラムは、大学・地域パートナーシップの視点から見るとまだ枠組みが見えておらず、研究の趣旨を地域に伝えて賛同を得ながら、協働するためのハードルを一つずつクリアしていきたいと考えています。

図４は著作権の関係により省略

写真5　甲賀市国際交流フェスタ

写真6　ブースでポスターを使って来訪者に学んだことを説明

事例研究四　留学生目線による長浜市の地域資源発掘ビデオ発表会

二〇一九年二月五日（火）、滋賀県立大学に学ぶ留学生一八名と日本人学生三名の合計二一名が長浜市役所でビデオ発表会を行いました。

留学生の多くは自分が学ぶ滋賀県のことをもっと深く学びたいと思っており、そのような希望に応えるべく授業（『Ｊａｐａｎ　Ｓｔｕｄｉｅｓ　Ｖ』）を二〇一七年度後期に開設しました。授業では各グループ独自の視点で長浜市の歴史・文化・社会を眺め、自らで調べたことを交えてビデオを制作しました。ビデオを地域と共有するため、長浜観光協会にビデオ発表会の開催の提案をしました。今年度で二年目の開講となります。授業では、国によって長浜を見る視点が異なるのではないか、という前提に立ち留学生の出身国ごとにグルーピングしました。そして、それぞれの国の目線で長浜の良さを見ることにしました。学生たちはグループ毎に長浜市内を歩き、魅力的だと思う場所やものを撮影してビデオとしてまとめました。ビデオ制作の過程では、『竹生島かわらけ投げ世界選手権』や、地元住民のそば作りグループ主催による『そば打ち体験』（写真７）への参加もしました。

発表会には長浜観光協会の方々（協会役員・インバウンド部会委員他）、長浜市産業観光部職員、一般市民など二〇名を超える参加がありました（写真８）。二〇一八年度は六つの学生グループが発表を行いました。長浜駅周辺から余呉湖に至るまで、学生たちはビデオ制作のために熱心に何度も長浜市に足を運びました。

発表会では、地域の人々とのふれあいなどビデオに入れ込むことができなかった感想を、ビデオ発表に続けて

口頭で発表しました。ある学生は、「長浜で出会った地域の人々がとても親切にしてくれた」と言っていました。留学生が日本語を使って感想を話す姿に会場からは「留学生たちが長浜のことを好きになってくれていることが伝わってきて、とても嬉しかった」、「ビデオの編集レベルがとても高かった」、といった声がありました。地元の方々が観光地とは思わないような神社や寺院にスポットを当てた作品もあり、「留学生が感じる長浜の魅力が確かに意外なところにあった」という反響もありました。日本人学生グループもビデオ発表会に有志参加し、日本の若者目線での長浜の魅力を発表しました。この点について、留学生のみならず、日本人の若者たちも地域づくりに参加するきっかけを作ることができたと考えています。また、今回は毎日新聞社と中日新聞社より取材があり、記事が掲載されました（図５）。

今回のビデオ発表を通じて、学生と地域との間で相互理解が進んだと考えています。また、ビデオ制作の過程では、長浜観光協会や地元のそば打ちグループの方々のご協力を受けており、大学と地域とが学生を介して連携するモデルができつつあると感じられた発表会となりました。また、発表会終了後には、今後も長浜市のために滋賀県立大学の留学生や日本人学生に是非関わって欲しい、というお話も受けました。

来年度のビデオ発表会に向けて、さらに連携を深めるとともに連携のすそ野を広げていきたいと考えています。

写真7　地域住民の指導の下でそば打ち体験

写真8　ビデオ発表会

図５は著作権の関係により省略

事例研究五　留学生による甲賀市の地域文化体験

二〇一九年一月二七日（日）、滋賀県立大学に学ぶ留学生一九人と日本人学生三人が甲賀市の地域文化を実践的に学びました。午前中は忍術屋敷にて甲賀忍者ついて学び、午後は陶芸の森にて信楽焼の素焼きの皿に絵付けを行いました。

築三〇〇年の屋敷の屋根に前日の雪が残る寒い朝でしたが、初めて見る忍者屋敷の隠し部屋や隠し扉などに学生たちは施設内で説明を熱心に聞いていました（写真９）。留学生の間では日本の忍者に対する関心は非常に高く、「留学期間中にここに来られてとてもよかった」といった反響がありました。昼食はコンビニエンスストアでとりました。留学生からは「コンビニエンスストアで昼食をとったことはよかった。皆、自分の好きなものを選ぶことができるし、お金と時間の節約にもなった」というフィードバックを受けました。日本人学生は、「せっかくなのでコンビニエンスストアではなく地元産品を使ったレストランで留学生に昼食を楽しんでもらいたい」と思ったようでしたが、留学生の反響を聞いて、「自分たちの思いと異なり、意外だった」と感じていました。このような両者の異なる思いは、日本人が外国人におもてなしを行う際に留意する必要のあることを示す良い例であると思います。

午後は、陶芸の森にて陶芸家から絵付け筆の指導を受けたのち、二時間ほど各々が思いのままに信楽焼の皿に絵付けをしました（写真１０）。参加した日本人学生は、「滋賀県にある信楽の陶芸をよく知らなかったので、地

域文化を学ぶとても良い機会になった」と話していました。

今回は、募集開始からわずか二時間余りで定員に達してしまうほど留学生に関心度が高いものでした。ある留学生は、「留学前には名前も知らなかった甲賀市がとても魅力的な地域であることを強く認識した」と言っていました。また、日本人学生も日本文化や地域文化の奥深さを改めて認識するとともに、留学生に自分の言葉で説明できるようになりたいと感じた、とのことです。一方で、日本人学生からは、「県立大学と地域との連携はまだ十分とは言えず、今後深めていく必要がある」というフィードバックも受けました。

この地域には留学生の受け入れに熱心な住民の方々がおり、来年度は地域の方々との連携を探り、大学と地域が一体となってプログラムを開発していきたいと考えています。今回の訪問がその第一ステップとなると考えています。

写真9　甲賀市の忍術屋敷にて

写真10　信楽焼の皿に絵付け

おわりに

『留学生×地域 地域資源発掘プロジェクト』は今年が初年度でしたが、地域の方々のご協力があって五つの事例を実施することができました。このプロジェクトを実施していく過程において、これまで交流のなかった地域住民間にも新たな交流やつながりができてきました（図６）。近江八幡市の住民の方からは、「留学生を地域で受け入れるために各家庭に説明をするなかで理解を示してくれる人が現れ、その人たちとのネットワークができたことは、このプロジェクトを実施した大きな収穫であった」と述べています。また、長浜市では浜湖月での職業体験を機に、市内の六つの宿泊施設が留学生受け入れに積極的な姿勢を示しています。このように、このプロジェクトをきっかけとして地域住民間、あるいは、異業種間での連携が拡がりの兆しを見せています。

現代社会では極端なまでに個人重視の考え方が浸透し、人と人のつながりが薄れています。その弊害として、孤独死、家庭内暴

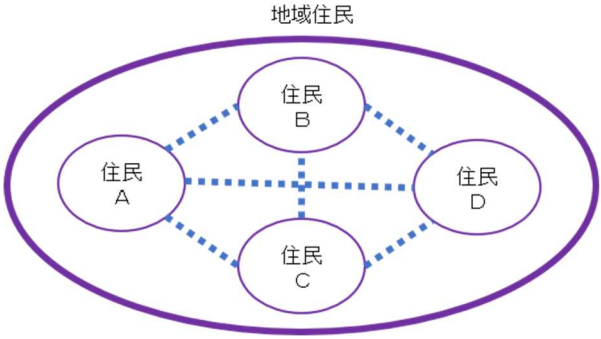

図6　地域住民間の新しいつながりの形成

力など、外部から見えにくい問題が増加し、住みにくい社会に向かってしまっているように思えます。

人と人とのつながりを取り戻すためには多大な時間と労力を必要とすることは想像に難くありません。しかし、このプロジェクトを通じて少しでも住民どうしの交流が深まり、地域住民・大学・企業など異なる立場の間の連携が地域の強さを形成し、持続可能な地域づくりに結び付けられればよいと思っています。

このプロジェクトの趣旨にご賛同いただき、ご協力をいただいた方々に紙面を借りてお礼を申し上げたいと思います。まず、『近江八幡市地域滞在プログラム』では、地域住民代表として近江八幡市での留学生地域滞在プログラムの企画・立案のため地域の参加者を広めることに日々奔走された西原志寿加様、地域貢献型企業として大学と地域とをつなぐ役割また地域側の取りまとめにご尽力をいただいた㈱まっせ 田口真太郎様、『長浜市地域社会体験プログラム』、および『留学生目線による長浜市の地域資源発掘ビデオ発表会』では、長浜観光協会の岸本一郎会長、同北沢繁和専務理事に、地域側の取りまとめ役と実施計画の策定にご尽力いただきました。さらに、富田人形浄瑠璃の阿部秀彦（富田人形共遊団・団長）様には国内外で講演などご活躍のなか、私たちが訪問の際に人形浄瑠璃を操る貴重な体験をさせていただきました。『甲賀市国際交流フェスタ参加』にあたっては、甲賀市国際交流協会事務局長の大河原佳子様にはフェスタの会場に県立大のための特設ブースをご提供いただきました。以上の方々のご尽力なしにはこのプロジェクトを完遂することは到底できませんでした。

さらに、今回のプロジェクトに率先して参加意思を表明し、フィードバックの協力もいただいた滋賀県立大学に学ぶ六〇人を超える日本人学生ならびに交換留学生の一人一人に感謝の意を表したいと思います。なかでも、工学部山崎玲さん、環境科学部正木美帆さん、人間文化学部加納由津子さん、同長谷川和夏さん、同西田朱里さ

ん、同山本萌絵佳さんには、この報告書の基礎となった本年三月一八日開催の『留学生×地域　地域資源発掘プロジェクト報告会』(近江八幡商工会議所中会議室)での発表および原稿の準備を快く引き受けていただきました。ここにお礼を申し上げます。

また、本文に書ききれない多くの地域の方々にもお礼を申し上げるとともに、このプロジェクトが多くの方々によって支えられて実現に至ったこと、多方面からの協働の重要さを改めて感じています。

最後に、私のこの研究テーマに共感を示し継続してサポートをしていただいた本学の倉茂好匡理事・副学長にお礼を申し上げます。

著者プロフィール
島田和久（しまだ かずひさ）

所　　属　滋賀県立大学　全学共通教育推進機構
専門分野　アジア研究、国際政治史
研究テーマ　地域レジリエンス，Eco-DRR（生態系を生かした防災・減災），地域におけるマルチステークホルダーによるパートナーシップの実践手法
主な著書　南三陸町にみる「地域レジリエンス」試論（『新しい地域文化研究の可能性を求めて』総合地球環境学研究所ブックレット，2018.3），“Working Together” for Peace and Prosperity of Southeast Asia: The Birth of the ASEAN Way（大学教育出版，2013.10）

平成 30 年度滋賀県立大学 SDGs 特化型地域課題研究
留学生×地域 地域資源発掘プロジェクト報告書 Vol.1

発行日／2019 年３月
著者／島田和久
発行／滋賀県立大学 全学共通教育推進機構
印刷／プリントネット株式会社